



生活の一部として溶け込んでいる橋。故郷を思い出す風景に、橋と川の風景を思い浮かべる方も多いのではないだろうか。

徳島は水の都。吉野川を含め大小約500の河川が流れている。吉野川に架かる橋を眺めると、形状にそれぞれの特徴があることが分かる。徳島県内の吉野川本流には46本の橋が架けられ、それぞれの橋が、その当時の最新工法を駆使して完成した。

当時「東洋一」「日本一」と言われたものが数多く存在し、吉野川は多種多様な橋が架けられている、まさに「橋の博物館」。

大河吉野川の恵みを受ける吉野川市には、潜水橋や、それぞれの時代の思いが込められた橋が架けられている。吉野川市に架かる橋のストーリーを訪ねた。



## 橋にかけられた思い～阿波中央橋編～



橋の形式は「単純櫛型ワーレントラス橋」  
トラスとは、まっすぐな部材を三角形に組み合わせた構造。その優れた構造からタワーや鉄塔、ドームの骨組みのように大きい建築にも用いられる。



「平和」を願ったイサム・ノグチの作品といわれている彫刻。（写真提供：徳島県）



橋脚には、洪水時に上流から流れてくる流木などから守るため、石を取り付けて防護している。県内では「阿波中央橋」だけに見られる。

吉野川市と阿波市を結ぶ「阿波中央橋」。  
吉野川橋と穴吹橋のほぼ中央に位置するので「阿波中央橋」と名付けられた。

昭和25年に着工。3年後の昭和28年に完成した。長さは821m。終戦後、日本で架けられた最初の長大橋であった。

この橋は当初、大正10年に徳島県が策定した「11大橋梁架設計画」の中で着工される予定であったが、その後の財政難により、第二次世界大戦後まで、橋は架けられなかった。

橋が完成するまで、この付近には「源太の渡し」があったが、吉野川が洪水で増水してしまうと渡しは利用できない。昭和3年には普通寺工兵隊の演習により木製橋が架けられたが、吉野川の洪水で大破や流失などの被害を繰り返し受けてきた。このため、沿岸の住民は、対岸に渡るためには、約20kmも離れた徳島市の吉野川橋、もしくは美馬市の穴吹橋まで迂回する必要があった。住民にとって、洪水がきても流れない「抜水橋」の完成はまさに悲願であった。

戦後まもない着工であったため、GHQ(進駐軍総司令部)の許可が必要であったこと、建設途中の昭和25年9月に発生した「シェーン台風」などの大きな台風で架設用資材が流失するなど、幾多の困難を乗り越え、GHQの資材提供もあって、「阿波中央橋」が完成した。

両岸の橋の入口には、座高70cm、高さ3mの楕円形の台座にこしかける男女の児童像がある。芸術家として世界的に有名なイサム・ノグチの作品だといわれている。また、橋の照明灯には阿波おどりで使用される高張提灯をモチーフにした電飾が施されていた。戦後最初に完成した「阿波中央橋」には「復興」と「平和」への思いが込められている。

橋ギャラリー 吉野川はまさに橋の博物館

岩津橋



◆川幅が150mと、吉野川の中流域の中で一番川幅が狭いところに架けられている橋。橋長175m。完成したのは平成5年。現在の橋が架かる前は、初代、2代の歴代2本の吊り橋が並んで架けられていた。橋の形式は斜張橋、珍しい片持ち式斜張橋を採用。斜張橋とは、主塔から斜めに引張ケーブルで橋桁を吊る構造。第二次世界大戦後、急速に発展した形式で、主塔の数や形、ケーブルの張り方などが多様で、デザイン性に富むことが特徴。

西条大橋



◆とくしまマラソンの折り返し地点となっている橋。平成16年完成。橋長734m。橋脚を少なくし、川が流れる部分の上部を柔らかな曲線のアーチ橋にするなど景観に配慮されている。



橋を渡る時に、橋のレリーフに注目。大正から昭和初期に喜劇俳優として活躍した吉野川市鴨島町出身の曾我廼家五九郎（そがのやごくろう）氏のレリーフがある。



川島橋



◆潜水橋とは洪水時に増水した水中に潜ってしまい、水が引くと姿を表し渡れるようになる橋。川島橋をはじめとする「善入寺島」に架かる橋は6橋あり、すべて「潜水橋」。昭和20年代後半から30年代にかけて架けられた。

昭和38年完成。大野島橋から善入寺島を經由し「川島橋」を渡るルートは、四国八十八箇所霊場の「第10番札所切幡寺」（北岸）から「第11番札所藤井寺」（南岸）へ向かう遍路道となっている。

瀬詰大橋



阿波麻植大橋



学島橋



## 「一番の思い出は阿波中央橋」遍路をきっかけに徳島に移住

大阪出身の今中さんが、奥様の宣子さんと一緒に吉野川市に移住して丸14年。移住のきっかけはお遍路だ。初めて歩き遍路で夫婦で徳島を訪れたのは平成9年の秋。当時は川島橋が工中だったため10番札所切幡寺から次の藤井寺に行くために、回り道をして阿波中央橋を渡って吉野川市内に入った。

一番の思い出は？と聞くと「吉野川との出会い。日も暮れかけた頃に、阿波中央橋を歩いて渡った事ですね。広い川でびっくりしました。とても長い橋やったな。足を引きずりながら頑張って歩いたことを橋を通るたびに思い出しますよ」と今中さん。また、遍路道の中でも難所として知られ「へんろころがし」と言われる藤井寺から焼山寺に向かう山道。山腹の展望台から眺めた吉野川の風景も忘れられないものとなった。

平成10年の春にも遍路で徳島を訪れた。徳島では、遍路道の途中で出会った子ども達の元気いっぱいの挨拶、地元の人々がお遍路さんに対して行うおもてなしである「お接待」など、数多くの思い出ができた。仕事を終え、次の人生の生活拠点として一番に思い浮かんだのが徳島。念願がかない、藤井寺も近い遍路道沿いで新生活をスタート。吉野川を含む阿波の歴史を学んだり、地域のボランティア活動にも積極的に参加している。道に迷っているお遍路さんの案内をすることもあった。吉野川との出会いは今中さんにとってかけがえのないものとなっている。

吉野川市 今中 忠重さん



今中さんの思い出、阿波中央橋の入り口。



川島橋を数多くのお遍路さんが通る。風光明媚なところとして知られている

### 吉野川に架かる橋を見に行こう！



橋の博物館とくしまのホームページURL  
<http://www.pref.tokushima.jp/bridge/>



「吉野川に架かる橋フォトコンテスト」の作品より

橋の構造や特色、歴史などについて教えていただいた徳島県道路整備課 総務・企画担当課長補佐 大森孝さん（右）と係長 岡部寛さん。

橋が作られた歴史や時代背景、当時の思い出などを紹介していただいた。「川があるところに橋があります。どの橋も当時の最先端の技術を駆使して架けられました。どの橋も美しいので一度じっくり見てほしい。吉野川は、東西に流れる全国的にも珍しい大河。朝は東側を眺めると川から朝日が昇り、夕日が川の西側に沈む風景が見られる、素晴らしい川です」と話していただいた。徳島県で取り組んでいるのが「橋の博物館とくしま」HP（ホームページ）。徳島県内に架かる橋や、バーチャル橋巡り映像、「吉野川に架かる橋フォトコンテスト」の作品などが紹介されている。橋の魅力が再発見できるHPだ。

## いんべの里で紙漉き体験

## 阿波和紙伝統産業会館

阿波和紙のはじまりは、今から1,400年ほど前、朝廷に仕えていた忌部(いんべ)一族が麻植の地に入り、紙づくりを始めたことからとされている。阿波富士と呼ばれる高越山では、和紙の原料である楮(こうぞ)が取れ、今でも紙漉(かみすき)という地名が残る。いかにこの地で紙作りが人々の暮らしと密接なかわりがあったかが分かる。

その伝統ある紙づくりを今に伝えようと、平成元年5月に誕生したのが阿波和紙伝統産業会館。以来、阿波和紙の製造、壁紙や財布、ノートなど現代のライフスタイルにあった商品開発、ワークショップやイベントなどの阿波和紙の啓発活動、阿波和紙を使って作品づくりに取り組むアーティストのサポートを行っている。

ここでの楽しみが紙漉き体験。箕桁(すけた)をミキサーにかけた和紙の入った水にまっすぐに入れ、左右に動かす。模様をつけて、乾燥すると出来上がり。ちょっとでこぼこしているけれど、

こうして出来たはがきは、世界にひとつだけのオリジナル。素朴で柔らかい風合いがうれしくなった。はがきだけでなく、ランチョンマットなどに使える半紙判も作ることができる。

◇阿波和紙伝統産業会館

吉野川市山川町川東141

TEL 0883-42-6120

○休館日

毎週月曜日(祝祭日の場合は火曜日)

午前9:00-午後5:00まで

入館料	一般	300円
	学生	200円
	小中学生	150円

体験料は別途必要



和紙独特の自然な風合いが楽しい紙漉き体験。

代表理事 藤森 洋一さん。阿波手すき和紙の製造技法は、県無形文化財に指定され、藤森さんは、その技法の保持者として認定されている。伝統産業の阿波和紙をアワガミへ。まだワークショップが一般的でなかった頃から国内外で精力的に紙漉きのワークショップや展示会を行い、世界に阿波和紙の良さを広めている。左は、藍染和紙を染める職人である奥様の美恵子さん。

工房では多方面からの要望に応えた多様な和紙作りを行う。和紙づくりには、吉野川の支流川田川の水がかかせない。